

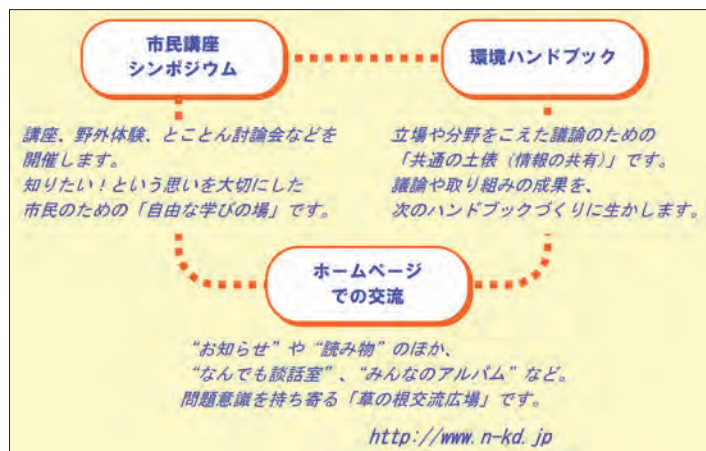
■ 環境をテーマとした教育プログラムへの取り組み

環境をテーマとした教育プログラムが求められる今日、環境コンサルタントがサポートできることは何か。異なった観点から取り組んだ3つの事例を紹介します。

市民の環境学習活動をサポートする取り組み

名古屋市は、新しい環境学習活動の輪(ネットワーク)として、2005年3月に「なごや環境大学」を開講しました。これは、市民・企業・大学・行政などが、環境に関する知識・経験・問題意識を持ち寄って、まちじゅうがキャンパスになるよう、市民講座やシンポジウムを展開する環境学習事業です。

「なごや環境大学」は、「市民講座・シンポジウム」と「環境ハンドブック」、「ホームページでの交流」の3つからなります。当社では、このうちの、市民向けのテキスト『「なごや環境大学」環境ハンドブック2005』作成のお手伝いをしました。



「なごや環境大学」の事業内容
(同 実行委員会(2005)『「なごや環境大学」環境ハンドブック2005』より)

この『環境ハンドブック』は、環境についての読み物や、考えを整理したいときの便利帳として役立てる以外に、市民講座においてテキストとして活用されることがあるため、大きくみて3つの工夫がしてあります。

まず第一に、読み手に、環境問題が身近なことであることを伝えるため、可能な限り名古屋市のデータもしくは事例を掲載しました。

第二に、可能な限り平易な文章で表現し、説明上どうしても省くことができない専門用語は、コラムなどを用いて解

説を加えました。環境問題は、本来は日常生活に密接に関連しているはずなので、専門用語や化学式の使用をなるべく避け、肩ひじを張らずに読み進めることができるようにしました。

第三に、読み手一人ひとりに環境問題について考えてもらうため、「問題提起型」の表現も取り入れました。環境問題は、立場や切り口によって見方が変わることがあるので、一方的に解答(解決策)を示してしまうのではなく、効果と影響を併記して、自発的に考えることを促すようにしてあります。

このような工夫を加えることで、「なごや環境大学」ならではの充実した内容の『環境ハンドブック』(A4版、カラー、約240ページ)となりました。

学校教育における総合学習の中での取り組み

全国の小中学校では、子供たちの生きる力を育てることを目的として、2002年度から「総合的な学習の時間」(以下、「総合学習」)が学校の教育課程に取り入れられました。総合学習では体験型・問題解決型の学習が重視されていますので、周辺の企業や市民が出張講座といった形でサポートしている事例もあるようです。国土交通省



学習活動のサポート—干潟観察会の様子

も社会資本整備の重要性を理解してもらうために、自ら管理している道路や川、海岸などを総合学習のテーマとして利用してもらうことを考えています。

当社では、中部地方整備局木曽川下流河川事務所の依頼によって、海岸事業の理解を深めるため、伊勢湾をテーマにした小学生用の総合学習カリキュラムを作成しました。

子供たちが海岸事業に目を向けるためには、海と人との海岸を通してどのような関係にあるのかを知ることが重要です。そこで、伊勢湾の学習では、「昔はどうだったの?」、「魚はどれくらいいるの?」、「台風や津波はどれくらい恐いの?」といった日常生活での疑問に対して、自然や歴史、文化、産業

などのさまざまな切り口から、海と人との関係を学べるカリキュラムを企画しました。

カリキュラムには、伊勢湾における豊富な業務経験をもとに、干潟の生物観察や漁業体験などのフィールドワークを多く取り込み、子供たちが興味を持って学べる内容にしました。また、当社がもつフィールド調査の技術や漁業関係者とのつながりは、カリキュラムを実施する際に、学習活動を実践的にサポートするのに役立ちます。

小学生を対象とした総合学習のカリキュラム

種 類	タイトル	中心となる学習活動
海岸の成り立ち	波をつかまよう	フィールドワーク
	昔の海岸にタイムスリップ	調べ学習
	人造海岸のひみつ	フィールドワーク
自然環境	水にもいろんな顔がある	フィールドワーク
	海岸の友達に会いに行こう	フィールドワーク
	僕らは水の掃除屋さん	実験・調べ学習
海からの恵み	漁師の気持ち	フィールドワーク
	塩を育てる田んぼ	調べ学習
	海のレストランにご招待	フィールドワーク
海の脅威	私たちの町を襲った台風	調べ学習
	川をまわる水制くん	フィールドワーク
	海とわたしたちの境界線	調べ学習
海の汚れ	海にも信号がついている	調べ学習
	海岸の友達からのメッセージ	調べ学習
	魚のなやみを聞いてあげて	調べ学習
産業や文化	車がなかった頃ののりもの	調べ学習
	世界とわたしたちを結ぶみち	調べ学習
	桑名・石取りむかしばなし	調べ学習

※タイトルは、子供たちが親しみを持てるように工夫しています。

実験施設における環境情報の場への取り組み

当社では、環境をテーマとした新しい取り組みとして、2005年度は、既存の公共施設である海洋関係の実験施設を、環境拠点や環境学習の場のひとつとして活用するための方法についての検討業務に携わっています。

検討の対象としている実験施設は、愛知県名古屋市にある中部地方整備局の伊勢湾水理環境実験センターで、この実験センターには、伊勢湾・三河湾の水の流れや水質の変化などを実験できる大規模な模型実験施設があります。

伊勢湾では、伊勢湾の環境の保全や再生に向けての気運が高まっており、2004年3月に「伊勢湾環境創造基本構想」が策定されています。この基本構想においては、伊勢湾

の海域環境を保全・再生していくための施策として「知識普及・意識向上」がとりあげられています。

このこともふまえ、実験センターを、本来の目的である模型実験以外に、環境の拠点としてどのように活用していくことが可能であるかを検討していくこととしています。

検討の視点は、大きく次の3点となっています。

○環境情報の拠点

実験センターに求められる情報の内容、情報発信の手法について。

○環境教育の拠点

実験センターと周辺既存施設が連携した環境学習メニューの作成、環境教育用のガイドブックの作成。

○市民との連携

実験センターを通して、市民とどのように連携・協働していくことが可能であるか。

検討においては、実験センター周辺の環境や教育に関する情報や国内外の事例調査を行うほか、学識経験者や環境教育に関係する教育関係者、行政関係者等及び市民・市民団体等から構成する会議において、幅広く意見、アイデアを求めながら、進めていくこととしています。

おわりに

ここで紹介した3つの事例は、環境教育の目的も素材も異なるもので、環境コンサルタントとしての取り組みの方向性は、必ずしも一貫したものではありません。しかし、共通している部分がいくつかあります。そのひとつが、環境問題を地域の課題として身近なテーマによって示すこと。もうひとつはわかりやすくすることで、これは、環境問題に対して継続的に関心を持ってもらうことにつながります。

環境コンサルタントは、日常の業務の中でとすれば専門的になりがちですが、実際は、常にフィールドに根ざした活動を展開しています。その経験が必ず役に立つと確信しています。これからも、人々の生活に密着した視点で環境問題をとらえ、環境をテーマとした教育プログラム作りをお手伝いします。

(名古屋支店 環境技術グループ 望月 洋輔)
(名古屋支店 生態解析グループ 森糸 真樹)
環境情報研究所 環境技術グループ 島田 克也